

## 井上泰宏(いのうえ・やすひろ)

1986年生まれ 37歳

福岡県北九州市出身。大学卒業後ボートレース関係の会社に就職。2015年から日刊紙記者として若松ボートを担当後、20年から芦屋ボートに常駐。趣味は釣り。車のシート下に餌が転がり込んだことに気づかず、しばらく異臭を放ち続けたのがトラウマ。

### 初優出にして堂々の逃走V

3月若松で行われたクラシックで今年もSGが開幕。佐藤隆太郎選手が予選トップ通過を果たし、準優、優勝戦と逃げてSG初優出にして優勝を飾る快挙を達成しました。昨年の8月にまるがめのメモリアルでSG初出場、10月には戸田のダービー、12月には住之江のグランプリシリーズを走っていますが、いずれも予選落ち。SG

no.22

### 新SG覇者誕生と出会いと別れ

戦線ではまるで見えない壁にぶつかっているように見えました。ただクラシックの少し前、戸田の関東地区選では通算4回目のGI優出。年間7Vを挙げてブレイクした昨年の勢いを今年も継続していることを感じさせました。2号艇で乗っていた地区選の準優は、1号艇が直前の大村でGII優勝を飾ったばかりでもあった地元佐藤翼選手をジカマくりで撃破。GI初Vには手が届きませんでした

イケメン記者の大物の予感！



佐藤隆太郎



が、気持ちの乗った攻めっぷりでした。

地区選の直後に芦屋を走った時にその準優の話を振ると「あれは気持ち良かったですね」と満面の笑み。ただし「勝ち切りたかったです」と優勝できなかったことを悔しがっていました。だからこそクラシックの優勝は「勝ち切れたことが良かったです。勝てずに『惜しかったね』や『頑張ったね』で終わるのでは全く違う」と喜びの声を聞かせてくれました。ただ、そこで終わらないのが先を見据える若武者。「(SGタイトル)1個で終わらないように。2個目、3個目を取ることが大事だと思います」と早々に視線を前に向けていました。

### レーサーにも父の顔あり

新たなSG覇者が生まれた今年も出会いと別れの春が訪れました。3月芦屋で圧倒的な優勝を飾

った森永淳選手には切ない別れがあったようです。娘さんが高校を卒業し、この春、進学のために上京。プライベートに関わる部分も多いので詳細は伏せますが、森永選手は引越しの直前で芦屋を走っていました。娘さんの話を聞かせてもらっている時の森永選手はどこか誇らしげでありながら、その倍ぐらいさみしげでもありました。珍しい父の顔を見せてくれました。ただ「家具も買わなきゃいけないね」というこちらの冗談には、「さすがにもう終わってるわ!」という通りにキレ味鋭く突っ込んでくれました。

4日間開催であまり時間のない中でこんな話をゆっくりすることができたのも、断然の一番時計を叩き出した前検から強力パワーに仕上がっていたからです。芦屋は4月13日が最終日の「日本財団会長杯争奪戦」が1年間使用してき





たエンジンの使い収めだったこともあり、終盤は上位エンジンが常に使われていました。乗り心地には違和感を残していましたが、好素性機を手にして出足も伸びも抜けたパワー。7戦5勝で優勝し、芦屋の前検では6・10だった勝率も6・29まで押し上げました。さらに圧巻だったのが続く地元の唐津で、10戦9勝3着1回と芦屋以上の成績で優勝を飾ると、勝率は6点台中盤まで上昇。A1級キープへの安全圏まで持ち込んだのです。

## 期末の状況も醍醐味

森永選手がそうだったように、ボートレーサーにとって4月は級別審査最後の1か月でもあります。前述した芦屋のエンジン更新前最後の1節「日本財団会長杯争奪戦」ではそんな勝負駆けに挑む地元の2人の活躍が光りました。前検時点で福岡支部の支部長でもある川上剛選手の勝率は5・96、そして植田太一選手は5・22。それぞれA1、A2級のボーダーより下の状態で乗り込んできました。

そして川上選手はオール3連対で予選トップ通過、植田選手は予選最終日の4日目に連勝を挙げて2位通過を果たしたのです。ともに勝負駆けに対する意識は強かったのですが、特に出走回数数の少なかった植田選手は「ここ（芦屋）で勝負を決めるぐらいの気持ちで来ていますから」と語っていた通りの気合の走りを見せて、予選を終えた時点で川上選手が6・06、植田選手が5・39まで上昇させました。川上選手は久しぶりの優勝がかかってきたことにより、よりナイスに。準優は10Rで植田選手が2着、11Rでは1号艇が敗れるという嫌な流れで迎えた12Rでしたが「展示の時に目の前で白い鳥がバサッて飛んで行ってくれたのを見て『俺の代わりに飛んでくれた』と思ったので、気が楽になりました」と鳥を味方に付けただけでなく、強めの向かい風だったの

が12Rだけ無風に収まるというツキも味方に逃げて優勝戦1号艇を勝ち取りました。

最終日は朝から強い追い風で終日安定板を装着し2周レースと荒れ水面になってしまいましたが、なんと全12レースを消化。伸びが上位級だった植田選手ですが、優勝戦は追い風7mが吹き荒れる水面では何もできず6着。やや尻すばみの感じになってしまいました。

たが、勝率は節間で0・20も上昇させて5・42に。一気に当時のA2級ボーダー付近までたどり着きました。そして、川上選手は三つどもえとなった先頭争いを制して優勝。若松、芦屋、福岡とレース場が3場もある福岡支部の支部長でどこも当然地元水面なのですが、出身地でもある芦屋町のレース場である芦屋は純地元の水面。準優後には「顔は一番と言ったら怒られそうだけど（笑）」と冗談も交えながら、「伸びと芦屋への思

いは誰にも負けない」と仕上がりに自信と愛する芦屋への気持ちも熱く語ってくれていました。そんな思い入れの強い水面で2022年に芦屋のGW戦を制して以来、約3年ぶりの優勝を飾ったのです。勝率も6・14まで上げて、A1級勝負駆けに望みをつなぎました。

この原稿を書いているのはまだ級別審査期間が10日以上も残っている状態。2人を含めて日々変化する勝負駆け状況だけでなく、今期は茅原悠紀選手の勝率9点台なるか？ というのも大きな話題に。2月に芦屋を走った時には「勝率？（F休みが多く）出走回数も少ないし、全く気にしていませんよ」と笑い飛ばしていましたが、一ファンとしては記録達成に期待しています。優勝争いだけでなく、期末ならではの話題も推理要素に組み込んで考えるのもボートレースの醍醐味ですよ。

